

Lecture Presentation Debate

FACULTY DEVELOPMENT MUSASHINO UNIVERSITY 2015 REPORT vol.1

平成 27 年度 武蔵野大学 FD レポート

武蔵野大学の教育力の向上に向けて

武蔵野大学学長・FD 委員会委員長

寺崎 修

本学は、大正 13 年に創設された武蔵野女子学院を母体としており、創設者高楠順次郎博士の「仏教主義により、未来の母性たるべき女子の智能を啓き、以てその徳を涵養する」という建学の精神に基づき昭和 40 年度に文学部を設置し、平成 10 年度に現代社会学部を開設。その後も、急速に進むグローバル化と、めまぐるしく変化する社会に対応するため、男女共学及び薬学部開設をはじめ看護学部、教育学部、グローバル・コミュニケーション学部、人間科学部、法学部、経済学部、工学部を次々に開設し、時代とともに変遷する多様な社会ニーズに対応しながら、専門的知識・能力を有する人材を養成し、社会貢献を行ってきました。

平成 24 年度には東京臨海副都心有明エリアに新キャンパスを開設するなど大学改革を積極的に推進し、現在では通学制 9 学部 9 研究科、通信制 2 学部 2 研究科を擁する総合大学となりました。また、大学教育の更なる充実に向けて、全学部・学科における「3 つのポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）」の策定、4 学期制・ナンバリング制度の導入など教育制度の改革を推進してまいりました。

制度のみならず、教育の核となる授業改善に向けて組織的に取り組むため、今年度「武蔵野大学 FD 委員会」が設置されました。FD（Faculty Development）は、「授業の内容・方法を改善し、向上させるための組織的な研修及び研究」といわれていますが、その内容と手法は様々であり、現状ではより幅広い活動が求められています。本学の FD 活動も単なる授業改善にとどまらず、高大接続と大学入学者選抜の一体的改革の方向性の展望、学生支援（アドバイザー）制度の活用、学外学修プログラムによる学生の成長の可能性の模索、カリキュラム改革の検証など、多様な視点から教育改革を組織的に展開するべく、FD 活動の領域を拡げ積極的に活動してまいりました。

今後も変容し続ける大学を取り巻く環境のもと、社会で活躍できる人材養成を目指し、時代と社会のニーズに応える質の高い大学教育を実現するためには、FD 活動は不可欠なものです。FD 活動が教職員の皆様の自己研鑽の 1 つの場となり、一人ひとりの教育力の向上が、本学の教育改革の原動力になることは間違いありません。

我々は FD 活動の成果を常に検証しながら、次の FD 活動へ効果的に繋げていくことによって、教育力の向上を図りたいと考えています。

本学の FD 活動にさらなるご理解とご協力を頂きたいとお願い致します。



Shiro Terazaki

Contents

FD 委員長（学長）挨拶	1	第 6 回 FD 概要	9
FD 委員会の活動	2	武蔵野大学 FD シンポジウム	11
全学 FD 研修会		授業改善小委員会の活動	
第 1 回 FD 概要	3	学修 IR 授業公開	13
第 2 回 FD 概要	4	学科 FD 活動	14
第 3 回 FD 概要	5	平成 28 年度 実施計画	16
第 4 回 FD 概要	6		
第 5 回 FD 概要	7		

FD

委員会の活動

FD委員会メンバー

委員長 寺崎 修 学長
副委員長 中村 孝文 副学長

小西 啓史 教務部長
北條 英勝 学生部長

落合 恒 大学事務部長
和賀 信之 学務課長

萩本 英樹 学部事務課長
丹羽 祐輔 武蔵野学部事務室長

洞口 光由 キャリア開発部長
久富 健 教養教育部会部長

飯山 晴信 武蔵野学務室室長代理
飯塚 信 IR推進室長

森 智恵 学部事務課係長

目的

武蔵野大学の教育理念の実現に向け、ファカルティー・ディベロップメント(FD)を積極的に推進し、学部学科及び大学院の教育方法を改善、向上することを目的としています。

FD委員会

平成27年度 第1回 平成27年4月27日(月)

- 議題：1. 構成員について
2. 平成27年度武蔵野大学全学FD実施計画について
3. 学部学科及び大学院が実施するFD活動の推進について
4. FDの参加率向上のための取り組みの推進について

平成27年度 第2回 平成27年5月18日(月)

- 議題：1. 平成27年度武蔵野大学全学FD実施計画について
2. 他大学におけるFD活動について

平成27年度 第3回 平成27年9月28日(月)

- 議題：1. 平成27年度第5回FD研修会について
2. 平成28年度FD実施計画について

平成27年度 第4回 平成28年2月29日(月)

- 議題：1. 平成28年度FD実施計画について
2. 平成27年度FDレポートについて

全学FD活動

▶第1回 全学FD研修会

日時：平成27年5月21日(木)
11:30～12:15
会場：武蔵野キャンパス 雪頂講堂(6号館)
講師：立命館大学 教育開発推進機構
教育・学修支援センター長 教授 沖 裕貴氏
テーマ：「ルーブリック評価導入の実際—
シラバス、ルーブリックでの学
生の学習を導く—」

▶第2回 全学FD研修会

日時：平成27年6月29日(月)
16:20～17:50
会場：有明キャンパス 3-302教室
(3号館3階)
武蔵野キャンパス 7201教室
(7号館2階) * TV中継
講師：大阪大学未来戦略機構
教授 川嶋 太津夫氏
テーマ：「教育における評価検証機能の充
実に向けて—IRの活用—」

▶第3回 全学FD研修会

日時：平成27年7月13日(月)
16:30～17:30
会場：有明キャンパス 3-302教室
(3号館3階)
武蔵野キャンパス 7201教室
(7号館2階) * TV中継

講師：文部科学大臣補佐官 鈴木 寛氏
テーマ：「高大接続の実現に向けた高等学
校教育、大学教育、大学入学者
選抜の一体的改革について」

▶第4回 全学FD研修会

日時：平成27年9月28日(月)
16:30～17:30
会場：有明キャンパス 3-302教室
(3号館3階)
武蔵野キャンパス 7201教室
(7号館2階) * TV中継
講師：北條 英勝 学生部長
テーマ：「アドバイザー制度を活用した学
習支援の充実について」

▶第5回 全学FD研修会

日時：平成27年11月2日(月)
16:30～17:50
会場：有明キャンパス 3-302教室
(3号館3階)
武蔵野キャンパス 7201教室
(7号館2階) * TV中継
講師：授業改善小委員会 委員
小西 啓史 教務部長
明石 修 准教授(環境システム学科)
加納 和子 講師(経済学科)
城月 健太郎 講師(人間科学科)

積田 淳史 講師(経営学科)
渡部 博志 講師(経営学科)
テーマ：「本学における Teaching method
の改革～授業改善小委員会の取
組みを通して～」

▶第6回全学FD研修会

日時：平成28年1月29日(金)
16:30～17:30
会場：有明キャンパス 3-302教室
(3号館3階)
武蔵野キャンパス 7201教室
(7号館2階) * TV中継
講師：小西 啓史 教務部長
久富 健 教養教育部会部長
テーマ：「武蔵野大学の教育改革・武蔵野
BASIS 7thの再構築について」

▶武蔵野大学 公開FDシンポジウム

日時：平成28年2月26日(金)
13:00～17:15
会場：有明キャンパス 3-301教室
(3号館3階)
武蔵野キャンパス 7201教室
(7号館2階) * TV中継
テーマ：「学外学修プログラムによる学生の
成長の可能性を考える」

全学FD研修会

第1回FD概要

第1回 全学FD研修会

日 時：平成 27 年 5 月 21 日（木） 11：30～12：15

会 場：武蔵野キャンパス 雪頂講堂（6 号館）

講 師：立命館大学 教育開発推進機構

教育・学修支援センター長 教授 沖 裕貴氏

テーマ：「ルーブリック評価導入の実際

——シラバス、ルーブリックで学生の学習を導く——」

[要約]

中教審答申の中で、内部質保証システムの確立が謳われており、それは学士課程教育を 1 本の周期で一貫性を持って構築することと解釈されている。その中には三つのポリシー（AP・CP・DP）を確立すること、そしてカリキュラム・マップやツリー、アセスメント骨子を確立することが含まれており、ルーブリック評価はそれらを実現するための、成績評価ツールの一つである。

この背景は既に言及されていることだが、グローバル化の進展に伴う国境を越えた高等教育の確立、質の保証が求められていることにある。EU ではポローニャプロセスといって、チューニングプログラムでどの大学の単位も交換できるように、コンピテンスと学習成果とのチューニングが行われている。このような状況で、早く日本の大学が高等教育の質保証をしなければ世界について行けなくなる可能性がある。

DP に関し、観点別の DP を作って公開している大学が多くある。カリキュラムの整合性・体系性については、マップやツリーなどを作って公開している。また授業については、観点別の到達目標を備えたシラバスを公開しており、さらに成績評価についても観点別到達目標ごとの成績評価基準の策定をして公開している。これが DP と CP の明示化に関する作業となる。

シラバスの到達目標の記載に関し、学生を主語とし何ができるかという書き方をし、できるだけ観点別に単文で表現することが望まれる。到達目標を教員の思いなどで設定するのではなく DP との関連で到達目標を設定し、成績評価を行うものだけに厳選することが大切である。また、成績評価に関わるもののみ記入する。そこがで

きていないとルーブリック評価にならない。

ルーブリック評価はアセスメントツールである。ルーブリック評価のイメージとしては、左側にシラバスに書いた科目の到達目標を書くか、あるいは何かの試験をしたり、レポートやプレゼンを課したときの評価の観点を書く。そこで Beginning レベルの評価はどのようなものか、Developing、Accomplished、Exemplary はどのようなものかというように三つか四つに分けた一覧表である。これは理工系の単純な知識、あるいは計算力を調べるテストに必要でなく、思考・判断・関心・意欲・態度・技能・表現などの観点の成績評価には極めて有効である。例えばレポート、学生の活動、作品・演出・実験の観察、面接、プレゼンテーションやグループ活動の自己評価などに、ルーブリックを作って学生に事前に見せることが大切である。ルーブリック評価は何よりも学習者にとって学習活動や自己評価の指針としての役割が重要であり、それを事前に公開することがが大学設置基準に示されている。どのようにして成績を付けているのかということを学生に見せることが求められており、これがルーブリック評価を実施することの一番大きな意味となる。

ルーブリック評価を導入する際に教員が行うこととして、まずシラバスに到達目標の観点ごとにどのような評価手段、評価比率を行うかを記入する。事前に学生が到達目標を読んで、どのような成績評価がなされるかが分かる書き方をしなければいけない。また、定期試験の得点が評価比率において何パーセントになるかと記載することが必要である。

我々が今までやってきたことは、学年や学部が違う人は、同じ授業をしても到達点が異なっていたり、毎年 15 パーセント程度のレポートを出さなかった人しか落ちないということに統一していたりなど、一番重要な教育情報である学生のカリキュラムの達成度が分からなかった。それを見えるようにするのがルーブリック評価である。ルーブリック評価を導入し 1 回目を実施したときに学生の多くが不合格となってしまうかもしれない。ただ、その情報を元にカリキュラムを改正するべきである。それに応じ、カリキュラム・マップやカリキュラム・ツリー、到達目標も変えなければならない。場合によっては DP も変えなければならない。ルーブリック評価を通して、それらを見つけるためのエビデンスが得られるであろう。

アンケート結果

①	内容に関する理解度	割合	②	「ルーブリック評価」について以前から知っていたか	割合	③	成績評価に「ルーブリック評価」を取り入れているか（教員のみ）	割合	④	今後の成績評価に「ルーブリック評価」を活用したいと思うか（教員のみ）	割合	⑤	内容に関する満足度	割合
	1. 理解した	30.4%		1. 以前から知っていた	10.0%		1. 取り入れている	6.8%		1. ぜひ活用したい	21.6%		1. 非常に満足	42.6%
	2. ほとんど理解した	57.4%		2. 知っている内容と知らない内容があった	33.6%		2. 一部取り入れている	30.1%		2. 活用したい	59.1%		2. おおむね満足	47.1%
	3. あまりわからなかった	6.6%		3. ほとんど知らなかった	54.7%		3. 取り入れていない	23.3%		3. 現時点では難しいと思う	13.6%		3. やや不満足	3.5%
	4. 全くわからなかった	0.0%		無回答	1.7%		無回答	39.8%		無回答	5.7%		4. 不満足	0.3%
	無回答	5.5%		合 計	100.0%		合 計	100.0%		合 計	100.0%		無回答	6.6%
	合 計	100.0%											合 計	100.0%

※小数点第 2 位を四捨五入しているため、内訳と合計が一致しない場合がある。

自由記述（抜粋）

- ・ルーブリック評価そのものに加え、評価方法ひとつで、教員・学生・カリキュラムに影響（効果）があるということが理解できた。
- ・ルーブリック評価が機能すれば、評価問い合わせは発生しなくなる可能性がある。
- ・CP と DP を総合的に見直していく PDCA サイクルの手法が具体的に知ることができた。
- ・DP、到達目標、成績評価（ルーブリック）が、かなり体系的に整備されてきたことを理解した。
- ・ルーブリック評価の真正評価のために必要な手順が理解できた。公平、公正な成績評価が、学士課程の質保障のための最後の砦である、との説明には極めて高い納得感があった。
- ・ルーブリックのあり方が日本の大学を除いて、全世界で実施されていたことに驚いた。
- ・海外の大学に比べて日本の大学の DP は複雑になりすぎている。もっと分かりやすくシンプルな言葉で書かれている必要がある。

第2回FD概要

第2回全学FD研修会

日時：平成27年6月29日（月） 16:20～17:50

会場：有明キャンパス 3-302教室（3号館3階）

武蔵野キャンパス 7201教室（7号館2階）*TV中継

講師：大阪大学未来戦略機構 教授 川嶋 太津夫氏

テーマ：「教育における評価検証機能の充実に向けて—IRの活用—」



[要約]

高等教育において、教育の質保証が強く求められている。単にどれだけ偏差値の高い学生を入学させたか、どれだけ授業を行ったか、インプット・アウトプットではなく、アウトカムの観点が重要となっている。その大学で4年間学んだことで学生がどう変わったのか、何ができるようになったのかということが大学教育の質というように再提示されている。学部研究か、あるいは学位プログラムで教育が行われているか、学習成果が身に付いているかの確認を大学自身が正しくモニタリングし、改善するような仕組みを作ってくださいというのが内部質保証システムであり、それが大学としてできているということを認証評価として確認することが、大事な考え方である。その中で Institutional Research の重要性が様々なところで問われている。

現在、Institutional Research という定義は一義的にはないというように考えていいだろうと思われる。IR の要素は以下に挙げる4つが考えられる。一つ目は情報に関する責任者である。二つ目は政策分析者である。三つ目はスピンドクターとして、いかに大学が明確に社会に情報を伝えるかということである。四つ目は研究として仮説に基づいて分析して検証している研究者としての側面もある。

内部質保証で大切なことは、アセスメントに基づいて、PDCA のサイクルを回していこうということである。最初に学習目標・学習成果を掲げて、それを達成するために必要な教育プログラムや学習機会を提供し、その学び習う学習成果が学び修める学修成果につながっているかどうかをアセスメントして、達成状況を見て、改善が必要かどうかの評価を行い、その評価が改善すべきということであ

ば、改善するというサイクルになる。この際、改善というのは単に個人的な印象・経験・体験だけではなく、証拠・情報に基づく意識決定、誰もが同じ土台の上で判断できる、共通のプラットフォームを提供するのが IR であり、アセスメントのデータということである。共通の土台として、客観的な情報を見てから、どのように進めるかということを含めて判断する。そのために IR やアセスメントは非常に重要な役割を持っている。

最後に今後の課題として少し IR の重要性を指摘する。アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの三つのポリシーに対して大学自身がアセスメントを行う、つまり学習成果が達成できるかどうかを確認することが重要である。

いつどこで誰が確認するのかというアセスメントプランを作成する必要がある。それに対して様々な支援を行うのが教学 IR である。今後、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを一体として作ることが関連法令で定められる予定である。このような形で学習成果を中心として大学の教育改善を回していく上で、IR は非常に重要である。

最後に課題として、今は教学 IR に非常に注目が集まっているが、教育を変えるためには大学全体の戦略・計画への落とし込みと、財務の裏付けが不可欠である。教育の問題だけで取り扱っていても、改善策が実現可能かどうかということがなかなか判断できない。教学 IR だけではなく教育改善は進まず、管理データや財務データを集めて体系的に具体的な分析をしていかないと教育改善に限っては、なかなか実現は難しいと考えられる。

アンケート結果

①	内容に関する理解度	割合	②	「IR(Institutional Research)」について以前から知っていたか	割合	③	（教員のみ）今後の教育にIRを活用したいと思うか	割合	④	内容に関する満足度	割合
	1. 理解した	16.0%		1. 以前から知っていた	18.5%		1. ぜひ活用したい	13.0%		1. 非常に満足	11.8%
	2. ほとんど理解した	56.3%		2. 知っている内容と知らない内容があった	51.3%		2. 活用したい	48.9%		2. おおむね満足	63.0%
	3. あまりわからなかった	18.5%		3. ほとんど知らなかった	29.4%		3. 現時点では難しいと思う	30.4%		3. やや不満足	17.6%
	4. 全くわからなかった	0.8%		無回答	0.8%		無回答	7.6%		4. 不満足	4.2%
	無回答	8.4%		合 計	100.0%		合 計	100.0%		無回答	3.4%
	合 計	100.0%								合 計	100.0%

※小数点第2位を四捨五入しているため、内訳と合計が一致しない場合がある。

自由記述（抜粋）

- ・Assessment と Evaluation が異なり、財務的な裏付けも必要だという点。
- ・授業や研究（卒研・院での研究）を開始する前にアセスメントを提示する意義と効果について、学生と教員の意識が異なる点に注意が必要。
- ・バランススコアカードのような KPI の作成が重要であること。
- ・教育の内部質保証のシステムがPDCAサイクルに基づいていること。
- ・ペーパー試験のみで学生の達成度を評価することはあまりよくないということ。多くの観点で評価すべき。

第 3 回 FD 概要

第3回全学FD研修会

日 時：平成 27 年 7 月 13 日（月） 16：30～17：30

会 場：有明キャンパス 3-302 教室（3 号館 3 階）

武蔵野キャンパス 7201 教室（7 号館 2 階）＊TV 中継

講 師：文部科学大臣補佐官 鈴木 寛氏

テーマ：「高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、
大学入学者選抜の一体的改革について」

〔要約〕

今回の高大接続改革の特徴は高校のカリキュラム、大学の入試、大学のカリキュラム、大学のディプロマポリシーの四つを同時に変えていくことである。

今重要なキーワードは、学力の三要素である。一つ目は知識・技能、二つ目は思考・判断・表現、三つ目は主体性・多様性・共同性である。

学習指導要領で定める基本的な知識・技能・判断力の定着が課題である。そこで、高等学校基礎学力テストというものを新たに導入することで、学力の定着を図っていく。

大学を志す高校生は、知識・技能はもとより、思考力・判断力・表現力に加えて英語力の読む、書く、聞く、話す、の 4 技能を身に付け、大学は、思考力・判断力・表現力を大学入学希望者テストと、個別大学の 2 次試験、あるいは推薦・AO 入試等で問うていくという大きな改革である。

既に知識・技能、思考力・判断力・表現力を身に付けている学生の主体性・多様性・共同性をしっかりと評価していくため、高校時代の 3 年間のアクティビティをフォーカスする入学試験も付加していかなければいけないだろうと議論している。

15 歳から 22 歳、あるいは 25 歳ぐらいまでの 10 年間で「書を読み、友や師と語り、仲間と何かを為す」ことに青春のエネルギーを一生懸命思う存分かけてほしい。そのことを一生懸命やった高校生が心配なく大学の入学者選考で最も評価され、大学でさらにそのアクティビティを加速することができるようなカリキュラムにしてい

きたい。そして、大学時代、キャンパスライフにエネルギーを注いだ人がディプロマポリシーでもしっかりと評価され、実社会においても評価されるのである。



今回の高大接続改革は、中学校、高校の教育の関係者、大学の関係者、そして実社会の就職担当の方や、企業の経営トップも含め、考え方を変えなければならない社会運動である。高校の学び、大学の入試、大学の学び、あるいは今の日本企業を中心とした就職活動がマイナスの影響を与えていないだろうかを問うていきたいということである。

これからは、Creative Collaborative Art Worker である。唯一無二の存在同士が一期一会の出会いの中でいろいろな大事な時間を刻んでいくことが Art Work である。しかもそれを Collaborative にやっていかなければいけない。Collaboration というのは、オペレーションをやるのではなく、いろいろなバックグラウンドの人たちがチームを作って誰一人欠けてもできない価値をまさに Create していることである。単なる知性だけでは解けない問題に、仏教知も含めて知恵によって、いろいろな困難を乗り越えていける力を付けていかなければいけない。

深い思考力・判断力・表現力という正解が一つに定まらないさまざまな矛盾、葛藤に、きちんと人間として向き合えるだけの知的精神的キャパシティがあるのかどうかということに入学者選考も向いていくであろう。

武蔵野大学は建学の精神をもとに、そうした深い人間性というものを追求していく素晴らしい教育をしてこられた。その活動がこれからの主流になっていくことをお話し申し上げ私の講演に変えさせていただく。

アンケート結果

①	内容に関する理解度	割合	②	「高大接続改革」について以前から知っていたか	割合	③	本学における高大接続改革の必要性	割合	④	内容に関する満足度	割合
	1. 理解した	29.3%		1. 以前から知っていた	15.2%		1. とても必要である	29.3%		1. 非常に満足	20.7%
	2. ほとんど理解した	58.5%		2. 知っている内容と知らない内容があった	57.9%		2. 必要である	50.0%		2. おおむね満足	69.5%
	3. あまりわからなかった	9.1%		3. ほとんど知らなかった	26.2%		3. どちらともいえない	18.3%		3. やや不満足	8.5%
	4. 全くわからなかった	0.0%		無回答	0.6%		4. 必要ではない	1.2%		4. 不満足	0.0%
	無回答	3.0%		合 計	100.0%		無回答	1.2%		無回答	1.2%
	合 計	100.0%					合 計	100.0%		合 計	100.0%

※小数点第 2 位を四捨五入しているため、内訳と合計が一致しない場合がある。

自由記述（抜粋）

- ・高大接続改革はどの学生レベルでも直一化したものがいいのか疑問である。思考力・判断力・表現力・多様性などあるにこしたことはないが、全員が全部これらの能力に適応できるとは考えにくい。適応できないイコール大学に行けないということになる。
- ・大学教員は高校の学びの詳細を把握しておくべきということ、改めて気がつきました。加えて、大学入試内容の改善、身にせまった問題であり、意識改革できるひと時となりました。
- ・学びの目的が明確でない中、入学する学生が増える一方で高校までの取り組み、体験の重要性が増すことは、より綿密に高校へ大学の学部の AP を伝える必要があると感じた。
- ・マークシート偏重教育の脱却というパラダイムシフトが高等教育だけでなく、中等・初等教育一斉に起きないと今の入試制度は変えられないのかなと思った。
- ・今回の改革に関して、本学でも現状の認識が弱いように思われる。入試制度×教員×執行部の調整・連携に早急に取り組む必要があるように思える。今回の FD において、課題を感じた教職員も少なからずいるはず。この件への取り組みが目に見えてこない不安に感じてしまうので、目に見える形で改革を進めていく必要がある。
- ・多数の教科・科目の連携及び大学の高度な学びと融合できれば、将来的に伸びしろのある子どもが育つと思う。そのためには、組織的な改革が必要だと思われ、探求型授業の重要性を改めて認識し、確信を持てた。

第4回FD概要

第4回全学FD研修会

日 時：平成27年9月28日(月) 16:30～17:30
 会 場：有明キャンパス 3-302 教室(3号館3階)
 武蔵野キャンパス 7201 教室(7号館2階) *TV中継
 講 師：北條 英勝 学生部長
 テーマ：「アドバイザー制度を活用した学習支援の充実について」

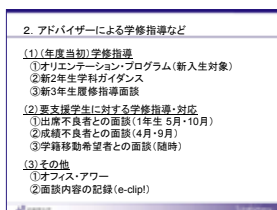
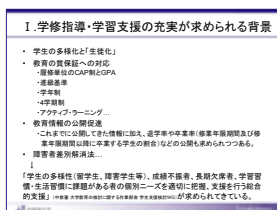
【要約】

学修指導や学習支援が求められている背景について説明する。その上で、本学は既にアドバイザー制度に基づく学修指導体制があるので、現行体制のあり方を確認し、現場で指導支援が必要な学生の姿についてデータを用いて説明する。それを通し、学修指導のポイントや今後の学修指導、学習支援の課題等を明らかにしていく。

学修指導、学習支援の充実が求められる背景には、一つは学生の多様化、二つ目は、学生の生徒化である。このような背景の中で教育の質保証が政策的に推進されている。三つ目は、教育情報の公開促進が求められている。また違う観点であるが、障害者差別解消法が来年から施行される。障害者に対する合理的配慮が求められる。

文科省の中央教育審議会のワーキンググループなどでは、留学生、障害学生、社会人学生等、それから成績不振者、長期欠席者、学習習慣・生活習慣に課題があるような多様な学生の個別ニーズを適切に把握し、支援を行う総合的な学生支援が求められている。

本学では従前からアドバイザー制度に基づくような学修指導が仕組みとして備わっている。細かな対応をし、学習面や生活面において学生の状況を把握し、適切な指導を行うことが、アドバイザー制度の趣旨である。アドバイザーが一つの窓口として適切に機能することによりいろいろ連携を取り、問題を抱える学生に対して改善、解決に結び付けていくという体制で



ある。

アドバイザーの先生方にお願いをしている具体的な業務は、履修指導、学修指導であり、これが一つ目の柱である。もう一つ大事な柱は、要支援学生に対する学修指導や対応である。出席不良者や成績不良者との面談、休学退学復学に関する学籍異動の学生への対応である。

学修指導のポイントを簡単に学年別で整理をした。

1年生は、入学時のミスマッチや不本意入学、大学生活へのいろいろな不適応がある。それらは、最終的に学業不振という形で現れ、進級基準に抵触し留年していくことになりかねない。

2年生の場合は、慣れたからこそ緊張感が失われて怠けることがある。成績が極端に落ちる学生に対しては注意が必要である。有明キャンパスに2年生から通学する学科の学生は、環境が大きく変化する。それが引き金となり、授業に出なくなることもある。

3、4年生になると、就職進路資格取得に関する悩みなどが多くなる。卒業に向けての成績評価、GPA対策が、3年次の始めにチェックされていないと4年間で卒業するというのは難しくなる。

まとめると、早期に問題を把握し適切に指導し、先生方も自分で抱え込まず何らかの形で連携し合うことが、学生指導を適切に進めていく上で大事である。

最後に学修指導、学習支援の課題は、2キャンパス体制になり、有明キャンパスの学科教員が1年生を十分に把握できていないという問題がある。そして、旧学科旧カリキュラムで特に留年の指導が難しくなっている。4学期それぞれに、何らかの学修指導ができるような体制が好ましい。また、原級留年生の出席状況の確認体制と、しっかりとした学修指導の効果検証体制を作っていくことが大事なのではないかと考えている。

関連するさまざまな学習支援には課題が多くある。例えば、留年や出席不良に対応するための補講や補習制度、転部転科制度など、柔軟な仕組みを検討していく必要がある。

勉学そのものに付いていけない場合、学生相互のサポート体制の導入が必要である。障害のある学生へはしっかりとした配慮ができる体制を作っていくことも望まれる。また、アドバイザーと学生が相談するときにはプライバシーポリシーというのが必要である。

何か気付きの点があれば、遠慮なくおっしゃっていただきたい。学生のあり様や学修指導のあり様、本学の課題などを日常的に話し合い情報共有や交換ができるような活動が望まれる。

アンケート結果

①	内容に関する理解度	割合	②	「アドバイザー制度を活用した学習支援の充実」について以前から知っていたか	割合	③	今後の教育にアドバイザー制度を活用したいと思うか(教員のみ)	割合	④	内容に関する満足度	割合
	1. 理解した	53.7%		1. 以前から知っていた	35.8%		1. ぜひ活用したい	19.8%		1. 非常に満足	29.9%
	2. ほとんど理解した	41.8%		2. 知っている内容と知らない内容があった	56.0%		2. 活用したい	63.0%		2. おおむね満足	59.7%
	3. あまりわからなかった	0.0%		3. ほとんど知らなかった	6.0%		3. 現時点では難しいと思う	7.4%		3. やや不満足	5.2%
	4. 全くわからなかった	0.0%		無回答	2.2%		無回答	9.9%		4. 不満足	0.0%
	無回答	4.5%		合 計	100.0%		合 計	100.0%		無回答	5.2%
	合 計	100.0%								合 計	100.0%

*小数点第2位を四捨五入しているため、内訳と合計が一致しない場合がある。

自由記述 (抜粋)

- 指導しているにもかかわらず、卒業留年者数が多いとすれば、背景を検討する余地がある。確かに留年学生等に関して全体の「ロックイン傾向」は見えそうだが、個別に学科ごとの背景(カリキュラム、学生要因等)(ミスマッチ)を見る必要がある。
- 1、2年次と関わる機会が多いので学年の自主性を育む関わりが大切だと考えた。能動的な行動が行えるように学習環境を整える。
- 「高校」との違いを明示し、学生自ら行動できるように働きかける。「大学生としての自覚」をもてるように関わりたい。
- 学修支援は、アドバイザーがまず窓口となっても、その後の精神的フォローなどが必要となる場合にはカウンセリングなどへスムーズに移行できるような体制作りが必要だと強く感じました。

第 5 回 FD 概要

第 5 回全学 FD 研修会

日 時：平成 27 年 11 月 2 日（月） 16：30～17：50
 会 場：有明キャンパス 3-302 教室（3 号館 3 階）
 武蔵野キャンパス 7201 教室（7 号館 2 階）＊TV 中継
 講 師：授業改善小委員会 委員
 小西 啓史 教務部長
 明石 修 准教授（環境システム学科）
 加納 和子 講師（経済学科）
 城月 健太郎 講師（人間科学科）
 積田 淳史 講師（経営学科）
 渡部 博志 講師（経営学科）

テーマ：「本学における Teaching method の改革
 ～授業改善小委員会の取り組みを通して～」

[要約]

「本 FD の趣旨と今後の教育改革について」

小西 啓史 教務部長

来年度からは全学で 4 学期制が導入され、カリキュラムマップの作成、ナンバリングなどもほぼ準備が整ってきた。後は最終調整をしている状況となっている。

ただこれは枠組みを作っているところであり、やはり重要なのは教育内容、中身である。今後は先生方のご協力を得て、授業改善によりいっそう取り組んでいきたいと考えている。今回の授業改善小委員会は、昨年暮れにカリキュラム改革委員会の中に立ち上げ、この春から実際の授業の場で様々な取り組みをしていただいている状況であり、今回の小委員会からの報告をヒントにして、今後の授業改善に取り組んでいきたい。

「小委員会の概要について」

渡部 博志 講師（経営学科）

本小委員会の目的は、学業、授業を通してどのように学生の質保証に貢献できるかを考えることである。様々な授業の方法を小委員会で模索し、授業カタログを通じて、先生方と授業の運営方法に関する、知の共有を行っていくきっかけ作りとなれば思っている。アクティブラーニングや主体的な学習と言ったときに、何か一つの方法があるとは思っていない。授業の位置付けやクラスサイズなどによって、授業の進め方や学習の成果を上げる方法は変わってくると考えている。授業手法に込めた意図を可視化することによって、どのようなことに困っているのかを、学科を超えて共有できるものがあれば共有して、改善に向けて共にアクションが起こせるかどうかを考えていきたいと思っている。



小委員会に課せられたミッション
 ・学生の「質」保証に資する
 授業方法を模索すること
 ～そのための授業を（実験的）に行うこと

学生の学びを支える

課外活動 学業 生活

《事例発表①》「英語で学ぶ経済学」

加納 和子 講師（経済学科）

科目は選択必修科目のひとつであり、経済学科の 7 割程度、79 名の学生が履修した。科目の到達点は、経済学の基礎的な英語表現について、英語で読み、聞き、理解し、問題を解くという、読解力

の習得である。また、グループ・プレゼンテーションを行うことにより、情報をまとめる、英語でアウトプットを行うという点も重視した。前半は、問題演習を含めた通常の講義形式で行ったが、その際、問題演習および予習・復習の一環として、e ラーニング教材を試用した。e ラーニング教材には、ビデオやテキストの読み上げが含まれており、リスニングの学習効果も見込まれる。また、英語圏の学生が使用するのと同じ教材を用いるという点にも意義がある。問題演習では、学生はある期限まで答えが分からない仕組みを取り入れ、繰り返し学習により理解の定着を促した。教材の試用は、問題提供、自動採点および集計機能が組み込まれており、教員の負担軽減につながった。後半のプレゼンテーションは、英新聞記事等を参考に経済学的考察を加え、グループ発表を行うというものであった。発表言語は日本語でもよいとしたが、予想以上にプレゼンのすべてを英語で行ったグループが多く、また講義で学んだ内容を活かして経済事象を考察しているグループもあり、成果が見られた。課題と感じているのは、次の 2 点である。第 1 は e ラーニングの導入についてである。特に語学力の育成を含む学習では導入が有効と考えるが、実際の導入では学生の費用負担（7000 円 + α ）が大きい。学生へのアンケートでは、2000 円以下であれば買うという回答が一番多かった。問題演習については、教員が作成した問題を取り入れることもできるので、TA などのリソースを今後このような所で生かしたらより効果があるのではないかと考えている。第 2 はプレゼンテーションについてである。全てのグループの資料を事前にチェックする時間などが十分とはいえなかった。こうした点で、TA/SA の活用ができればよいと考える。



科目到達目標
 ・講義到達目標
 ～経済学の基礎的な英語表現に習熟する。
 ・受講者に求めること
 ～基礎的な経済学の用語を習得する。
 ～基礎的な経済学の内容を英語で読み、聞き、理解する。
 ～英語で問題を読解・回答する。
 ～英語でのプレゼンテーションを行う。

《事例発表②》臨床心理学

城月 健太郎 講師（人間科学科）

本授業は、人間科学科において 2 年生が全員受ける必修授業である。授業では、毎時間予習の課題と復習の課題のレポートを課している。TA には、レポート内容を見て授業の初めにフィードバックをしてもらうためのパワーポイントなどを作って紹介をさせている。それに対して、私からコメントしたり質問したりするような取り組みを行っている。ある程度一律に家庭でも勉強をし、授業の中で聞いたことを思い出して自分なりに学業に関心を深めてほしいということで、毎回予習復習のレポートを課している。それから、繰り返しフィードバックを行っている。今回の講義の取り組みにおける狙いは、それらを丁寧にやることである。このようなことを授業の中で取り組んでいるが、出席者が 200 人と多人数のため、授業の初めはざわついている。この講義では、「じゃあ、TA さんが発表します」と言うと、割と静かになって TA の話に注目をして聞いてくれる感じもある。学生は特に私と TA のやりとりの中で、どのようなことを言うのか、どのよう



経過と様子
 ・TA(院生)発表には学生が関心が高い
 ・教員とTAのやり取りには関心がある
 ⇒大講義での相互交流を促進
 ・TAの院生の発表スキルの向上にもなっている
 ・やる気や意欲の高い学生は学習の機会を設定することで、質の高いレポート作成をしている

な意見を持っているかというところに、かなり関心を持っている。また、TAのパワーポイントの資料がだんだん増えていき、やる気があると思っている。発表が少しずつうまくなっているTAもいる。そのようなところにも貢献していると思っている。TAにとって、発表するとかまとめるということ自体は、教員と違って慣れない作業なので時間的負担や労力の負担がある。

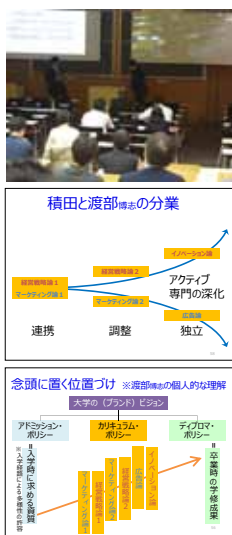
課題としては、TAの人材確保というのが問題としてある。加えて学科のカリキュラム全体像からこの授業にどのぐらい負担を掛けるべきか考えることが大切であり、他の先生方との調整も場合によっては必要になるかと思っている。

【事例発表③】経営学科

渡部 博志 講師、積田 淳史 講師

(渡部) 大学のビジョン、ポリシーの下で学科の教育方針が決まっていけるのだと考えている。ならば、経営学科の中でマネジメントエリアと呼ばれる教員同士で、どの科目を通じて、どの能力のどの部分を、どのような方法で高めるのかといった内容を共有した上で、ある種の筋を立てないといけなのではないかと考えている。今回、2人で発表するのも、単独でできることと全体でできることは違うと考えるからである。積田先生担当の経営戦略論1と私の担当のマーケティング論1では綿密に連携を取りながら、学問領域として密接にある内容を、敢えて異なるやり方で教えていこうと調整している。結論から言うと、マーケティング論1では予習に力を入れて、経営戦略論1では復習に力を入れている。両科目は2年次の1学期、2学期と順に開講される科目でもあるので、内容に加えて、学修態度や学習の習慣づけも教えている。

(積田) 渡部先生のマーケティング論1を経て、経営戦略論では学習の効果を高める仕組みをSAを使って構築し



た。注意したのは三つである。一つは、モチベーション、どのくらいやる気を持てるか。二つ目は、学生の不要なコスト、必要のない作業をできるだけ減らすこと。三つ目は、学生の集中力には限界があるということを正しく理解してあげる。この3点に気を付けて工夫を凝らした。毎週提出される約220枚のミニレポートを全部チェックして、SA6名の学生の手を借りながらコメントを返した。大学3年生であっても得意な分野であれば大学2年生を指導する力は十分にある。学生に関して、何をコストカットしたかという大きく分けて二つ。一つは、学生に絶対印刷させない、使用する教材全てを印刷して配布した。あと1、2回欠席しても、いい成績がとれるという設計にした。集中力への配慮としては、その日に取り組む小テストの課題をすぐに配布した。要は私の話を聞くのに飽きたら、これを読むことを認めた。またコミュニケーションシートというのを毎回配布し、学生のアンケートに答えることで学生とのコミュニケーションをとるように努めた。

授業後のアンケートで、学生の自己申告学習時間を合計したところ6400時間程度であり、これはいい成果だったと思っている。また出席率が平均90パーセントを超えたのは本当に驚いた。ただ、私の作業だけで115時間かかり、SAの作業は230時間かかってしまったため、非常にコストが高かった。

「授業支援について」

友田 学務課係長

高い学習効果をもたらす授業運営に必要な支援として、どのようなものができるのかを授業改善小委員会の中で検討してきた。具体的に行ったのが、ICカードリーダーによる出席管理ができるための、カードリーダーの貸与である。先生が出席管理にける負担時間の軽減にある程度貢献できると考えられるが、運用を検討しなければならない。また資料印刷に掛ける先生や学生の負担を軽減するために資料の印刷を学務課で行ったが、全学的に実施するというのであれば、印刷体制を検討しなくてはならない。加えて、アクティブラーニングに対応した学習環境の整備や自習室の整備等、学習環境の整備を併せて検討しており、今後もカリキュラム改革委員会を中心に検討していきたいと考えている。

アンケート結果

①	内容に関する理解度	割合	②	内容に関する満足度	割合	③	授業改善の必要性を感じているか (教員のみ)	割合
	1. 理解した	22.4%		1. 非常に満足	15.7%		1. 強く感じている	13.6%
	2. ほとんど理解した	39.6%		2. おおむね満足	43.3%		2. 感じている	53.1%
	3. あまりわからなかった	4.5%		3. やや不満足	5.2%		3. あまり感じていない	3.7%
	4. 全くわからなかった	0.0%		4. 不満足	0.0%		4. ほとんど感じていない	0.0%
	無回答	33.6%		無回答	35.8%		無回答	29.6%
	合 計	100.0%		合 計	100.0%		合 計	100.0%

※小数点第2位を四捨五入しているため、内訳と合計が一致しない場合がある。

自由記述 (抜粋)

- ・TAには、専門的知識が必要だが、そのような人材がなかなかなくて使えない。
- ・「TAを教育する」という言葉は、はっとさせられました。今までTASAを出席管理などで活用して来ましたが、もう少し角度を変えて、授業内容改善、TASA教育などうまく活用しようと思いました。
- ・授業内容の重複を避け、また、学年が上がるごとに専門性が一層高まるようにカリキュラムを組むことが必要だと思います。
- ・先生方の取り組みを知ることができて、とても良かったです。今後の参考にさせていただきたいと思いました。
- ・TASAの活用方法について参考になるが、教員自身の改善が必要。科目間や学部間の連携は重要である。グループ学習、グループ発表、グループ評価などアクティブラーニングに向けた取り組みは必要であろう。
- ・出席をICカードで行うと出席確認の教員の負担は減るが、100人位いても毎回名前を確認できるかぎり名前を覚えることも教員として必要と思う。

第6回全学FD概要

第6回全学FD研修会

日時：平成28年1月29日（金） 16:30～17:30

会場：有明キャンパス 3-302 教室（3号館3階）

武蔵野キャンパス 7201 教室（7号館2階）＊TV中継

講師：小西 啓史 教務部長、久富 健 教養教育部会部長

テーマ：「武蔵野大学の教育改革・武蔵野BASIS 7thの再構築について」

〔要約〕

「武蔵野大学の教育改革について」

小西 啓史 教務部長

今日の趣旨は、これまで行ってきた様々な改革を整理したことである。アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを見直し、今まさに武蔵野大学は体系的なカリキュラムを構築し、教育を進め、一貫性のある教育体系を作っていきたい。入学時から、ずっと体系的に学んでいくことで、ディプロマポリシーで明示した能力を身に付けた学生を育成しようと考えている。ここでは具体的に、カリキュラムMAPというものを作り、体系的なカリキュラムを明確に学生に示している。もう一つは、体系的なカリキュラムという中において、履修モデルというものを作っている。さらに、身に付く能力をカリキュラム・チェックリストで示すということも行った。いわゆる知識の獲得が達成できる。そして思考や判断等、こういった能力も身に付いていくことを示している。これらをトータルして、体系的に学んでいくことで、ディプロマポリシーで明示した能力が、武蔵野大学で学ぶことによって身に付いてくるということになる。



特にアクティブ・ラーニングが求められている。アクティブ・ラーニングというものを、ディプロマポリシー達成のための一つのエクイティ方法として設定している。アクティブ・ラーニングを実質化するために、今後はさまざまな施策が必要である。

体系的なカリキュラムを進めていくが、ただ、その前提として、いくつかポイントがある。これは評価の問題であるが、客観的かつ公正、厳正な評価が必要になってくるだろうということである。そのために、各学科でそれぞれの科目について、到達目標を設定していただいた。また、ルーブリック評価の導入を積極的に考えている。もう一つ、さまざまな形で、GPAを一つの指標として導入したいということを考えている。

ここに挙げたのは、今年度の私立大学等改革総合支援事業である文科省の補助金である。日本の大学は補助金がないと立ち行かないので、こういったことを実施していくことは必要である。問題は言われたことを行っているだけでは、教育改革ではないということである。主体的に教育改革に取り組んでいくということである。そして、今後は他大学との差別化が必要になる。文科省が求めているもの

は、ほぼ導入できているので、今後は具体的に授業の中身、授業改善を今まで以上に進めていかなければいけない。それによって十分な力を付けた学生を社会に送り出すことである。社会から認めていただけるような教育を進めていく必要がある。

最後に、今はあくまでも制度として導入をしたところであるので、さらにどう推し進めて、実質化していくのかということが、大きな課題になっている。

「武蔵野 BASIS 7th の再構築について」

久富 健 教養教育部会部長

『武蔵野 BASIS 7th』、この取り組みは平成28年度に7年目を迎える。全学的な取り組みとして、三つの取組みがある。カリキュラム改革委員会で、今までの取り組みを検証すること、各学科の先生方の専門課程等をつないでいくこと。それをどう再構築するのかである。ポイントは三つある。1点目が見直しで、科目の廃止、中身の変更を行ってきた。2点目は、6年間の取り組みの現状で、二つの採択による、事業のバックアップをいただいた。そこで一番大きな問題は、武蔵野 BASIS は独立したものではないということである。あくまでも基礎課程と専門課程であり、各専門のベースに向かった土台づくりである。3点目は、武蔵野 BASIS がどう連続していくかが、これから一番の教育的な勝負と考えている。その三つのポイントを検証した上で、先生方と一体感を持っていきたい。

そして再創造のキーワードとしてアクティブ・ラーニングがある。アクティブ・ラーニングを全学で、特に BASIS の環境の中に落とし込んでみる。それが促進ということになる。昨年に AP という、Acceleration Program の採択をいただき、早速それを具体的に科目として持っていき、武蔵野 BASIS 7th はリニューアルをする。リニューアルとは、科目の中身を変えるのではなく、今の科目の中で精査をしていくということである。特にアクティブな知に注目し、そ



して、この四つの文言に注目していただきたい。これは全てアクティブ・ラーニングの流れを示している。『学びの基礎力を基盤とした専門能力』、『他者と自己を理解し、自発的に踏み出す力』、『課題を多角的に捉え、創造的に考える力』、『多様な人々のなかで、自らの考えを表現・発信する力』。この全般の部分は、BASIS の科目が到達目標にしなければいけない部分である。ディプロマポリシーが、その後に専門能力や踏み出す能力につながっていくと考えている。

また、フィールド・スタディーズという一つの仕組みをつくらうとしている。それをつくりながら、アクティブ・ラーニングを進めていこうとしている。要するに、授業と実践。そこに小さくフィールド・スタディーズ、サブメジャーという言葉がある。ギャップイヤーのこともあるので、これを BASIS にきちんと組み込んでいくということである。BASIS は土台である。全学の基礎課程を各学部につけていきたいという願いがある。これが 7th の目標である。

ポイントを整理すると、多様なプログラムで産学協働によって展

開し、学生たちのアクティブ・ラーニングを促す仕組みをつくりたい。来年はアクティブ・ラーニングを主眼とし、基礎セルフディベロップメントを充実させ、フィールド・スタディーズを展開するという、二つのポイントに絞って転換していきたい。

武蔵野BASIS 7th と名付けたが、8th、9th と行きたい。専門の先生方の声を反映した形で作り、今後10年の取り組みを視野に入れながら、ボトムアップをしながら進めていきたい。

アンケート結果

「武蔵野大学の教育改革について」

①	内容に関する理解度	割合	②	武蔵野大学の教育改革の状況について他大学と比較して	割合	③	内容に関する満足度	割合
	1. 理解した	42.8%		1. 優れている	28.3%		1. 非常に満足	27.1%
	2. ほとんど理解した	52.2%		2. やや優れている	53.8%		2. おおむね満足	63.9%
	3. あまりわからなかった	4.4%		3. やや遅れている	7.6%		3. やや不満足	6.5%
	4. 全くわからなかった	0.0%		4. 遅れている	0.7%		4. 不満足	0.6%
	無回答	0.6%		無回答	9.7%		無回答	1.9%
	合 計	100.0%		合 計	100.0%		合 計	100.0%

「武蔵野BASIS 7th の再構築について」

④	今後の成績評価に「ルーブリック評価」を活用したいと思うか（教員のみ）	割合	⑤	内容に関する満足度	割合
	1. ぜひ活用したい	21.6%		1. 非常に満足	42.6%
	2. 活用したい	59.1%		2. おおむね満足	47.1%
	3. 現時点では難しいと思う	13.6%		3. やや不満足	3.5%
	無回答	5.7%		4. 不満足	0.3%
	合 計	100.0%		無回答	6.6%
				合 計	100.0%

※小数点第2位を四捨五入しているため、内訳と合計が一致しない場合がある。

自由記述

「武蔵野大学の教育改革について」

- ・ 箱は整っているが、実態の伴わない制度運用が見えれるように思います。その背景には現場の実態に想いを寄せずに様々な施策が行われていることがあるように思います。学生のことをまずは知り、その接点となっている教職員がなにをできるか、すべきかを充分には検討できていないように思います。
- ・ これらの成果がそろそろ見える頃だと思います。例えばCAP 制導入によって、成績が総じて上がった（GPA）など関連づけてできるとよいかと考えます。講師は誠意を尽くしてくださったと思います。期待通りです。
- ・ 大学・教員側の改革を同時に、何よりも学生側にも教育方針の理解（アクティブ・ラーニングがなぜ必要なのか？何を身につけて欲しいのか？）による主体的な姿勢が必要だと思います。是非学生に向けての説明会等も開いていただきたいと思います。
- ・ 大学全体の教育改革の変遷がよく分かりました。様々なことを取り入れる意欲はよく分かるのですが、全体の Goal（全学 DP）と方法としての取り組みの関連がもう少しみえると良かったと思います。またぜひ、全学 DPBASIS、各学部 DP が構造化されるとわかりやすいと思います。
- ・ 何故、今、教育改革なのか、という背景が伝わりました。一方で本学がどのような大学になりたいのか、教育の特色がどこになるのか、教育改革に向けたその戦略的スローガンを詰めていく必要があると改めて考えさせられました。
- ・ 4 学期制の導入など本学の進める改革に対し、学生の理解が得られていない。今後は改革事項についてその目的や変更点を学生にも丁寧に説明していく必要があるように感じる。本来より良い大学にするための改革であるはずなのに、学生の理解がないまま進めようと、学生の不満はより大きくなり、本末転倒である。

「武蔵野BASIS 7th の再構築について」

- ・ 学科としてカリキュラムなどを体系づくりを行っていること、大学本部が動ける改革とが連動していないことによって生じている問題があるように思います。大きな方針をまず示していただければ解決できることもあると感じます。決まってから降りてくると、対処できず、そのしわ寄せが結果的に学生にいつていると思います。
- ・ グループワーク、フィールドワークの大切さは分かっているのですが、3,4 年生をみると基本的なスタディスキルや「読み書き」に大きな課題があります。特に「書く力」は思考を鍛え、洞察力を養ううえでじっくり大学として取り組みたいところです。BASIS で強化されるいいと感じています。
- ・ 「アクティブラーニング」ということで「学生が自ら学ぶ」ということと、「学生が大学の外で実践的な事柄に関わる」という二つの別のことが議論されているように思いました。私としては、実践的な事柄は、社会人になってから学べば良いことなので「学問的なことを学生が自ら学ぶ」という方向を教えて頂きたいと思います。
- ・ 武蔵野BASIS は、武蔵野大学の魅力・特色の一つであると思うので、ぜひ現場の教員の意見を反映したカリキュラム改革を行っていただき、そうすることで学生にとってもさらに魅力的で満足度の高いBASIS になり、さらなる大学の発展につながると思う。語学科目でアクティブラーニングを推進するには、少人数クラスが必須なのでぜひ改善して頂きたい。
- ・ 「学外学修プログラム」にFW,Volunteer,Internship が列挙されているが、「Service Learning」の概念を念頭に置いた方がよいと思いました。シチズンシップの教育においてもSL は重要な位置づけになるはずで。入学前教育については、入学前留学（ショートギャップターム）のようなプログラムを開発してはいかがでしょうか？（前任校で実施していました）いかに学習へのモチベーションを上げるかが鍵だと思います。

武蔵野大学FDシンポジウム

日 時：平成 28 年 2 月 26 日（金） 13：00～17：15
会 場：有明キャンパス 3-301 教室（3 号館 3 階）
武蔵野キャンパス 7201 教室（7 号館 2 階）＊TV 中継
テーマ：「学外学修プログラムによる学生の成長の可能性を考える」

プログラム

- オープニング映像 13：00～13：05
「武蔵野 BASIS－6th－アクティブ・ラーニング」
- 主催者挨拶 13：05～13：25 武蔵野大学 副学長 中村 孝文
- 基調講演 13：30～14：00
「大学教育改革の方向性」
文部科学省高等教育局大学振興課 専門職 河本 達毅氏
- 事例発表1 14：10～14：35
「北海道東川町役場における長期インターンシップ（小西 和信ゼミ）」
武蔵野大学教授 図書館長 小西 和信
- 事例発表2 14：35～15：00
「『地方＆観光』振興プロジェクト（増淵 正明ゼミ）」
武蔵野大学客員教授 増淵 正明 / 増淵ゼミ生
- 事例発表3 15：00～15：30
「大川市の地方創生－契機となった産官学連携－」 福岡県大川市長 嶋山 二郎氏
- パネルディスカッション 15：45～17：15
「地方創生における大学の役割と責任を考える」
司会進行：武蔵野大学教養教育リサーチセンター客員教授／株式会社文藝春秋 監査役 勝尾 聡
- パネリスト：北海道東川町長 松岡 市郎氏
高知県梼原町長 矢野 富夫氏
鹿児島県徳之島町長 高岡 秀規氏
武蔵野大学教授 久富 健
- 閉会の挨拶 武蔵野大学教授・教養教育部部長・教養教育リサーチセンター長 久富 健



基調講演

「大学教育改革の方向性」

文部科学省高等教育局大学振興課専門職 河本 達毅氏

[要約]

大学教育改革の方向性について考える時、我が国が今後向き合う社会状況と、その社会で活躍する為に学生をどのように育成するかが重要である。世界の高等教育機関の学生数は約 10 年間で倍増し、先進国や近年経済成長を遂げている国は、国の発展の基盤として高等教育を重視している。

対して我が国では少子化の急激な進行により、生産年齢人口が大きく減少することが予測され、今後の成長戦略において大学の役割を今一度見直すべき機会である。優れた知識やアイデアの積極的活用によって発展するとともに、人が人を支える安定的な成長を持続的に果たす成熟社会に向けて認知的能力、倫理的、社会的能力、創造力と構想力、教養、知識、経験を土台とした「学士力」が、予測困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる。

そのためには生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力の育成が必要であり、学びへの動機付け・スイッチ切り替えをきっかけに主体的・能動的学修（アクティブ・ラーニング）への大学教育の質的転換が不可欠である。

受動的から主体的・能動的な学びに転換する機会としてギャップイヤー・プログラム（長期学外学修プログラム）に注目し、武蔵野大学の取組みを大学教育再生加速プログラムの 1 つに選定した。これからの武蔵野大学の教育活動に大きく期待している。

〈事例発表 1〉

「北海道東川町役場における長期インターンシップ（小西 和信ゼミ）」

武蔵野大学教授・図書館長 小西 和信

[要約]

産官学連携ゼミとは企業・自治体と連携した長期インターンシップ型、学科横断型のゼミ形式、「総合研究」を課しサブメジャーを目指す理論と実践を有機的に構成した教育プログラムである。始まりは 2011 年秋、産官学連携ゼミ先となる北海道東川町に赴いた。

2012 年 8 月に東川町長期インターンシップを開始した。第 1 期の参加は 9 名の女子学生、以後活動を継続している。参加した学生達は 4 年次で学修する「総合研究」において「児童書の選定基準」、「つながりを深める PR 活動」、「地域資料のデジタル化」など東川町での学びをテーマに研究を行った。

これからも東川町との連携を継続・強化していきたい。そのため大学からのお願いとして「学生を特別扱いしない」、「学生の自主

画として本の読み聞かせの開催」、「学生による課題発表会」など、学生を“お客様”扱いせず“町の一員”として町のために能動的に行動することを応援して欲しい。この長期インターンシップを通じて、学生達は主体性、コミュニケーション能力、社会性を身につけるなど確実に成長している。まさに東川町の持つ教育力によるものである。

長期インターンシップの今後の課題は、自治体との円滑な連携、目的の共有、自治体への貢献度、サブメジャーとしての質の確保にあり、その最大のミッションは「人材育成」と「地方創生」である。

この場を借り手あらためて、東川町の皆様、連携先の自治体の皆様、関係者の皆様、そしてゼミ生達へ賛辞を送りたい。

〈事例発表 2〉

「『地方&観光』振興プロジェクト（増渕 正明ゼミ）」

増渕ゼミ生5名

政治経済学部 経営学科 4年生 牧野 智之

政治経済学部 経営学科 4年生 笹谷 亮裕

人間科学部 人間科学科 3年生 佐成 美咲

人間科学部 人間科学科 3年生 梶原 由有

環境学部 環境学科環境学専攻 3年生 佐藤 瞳

〔要約〕

ブランディングマネジメントゼミは自ら課題を設定し、自らの意志で動き、確かな成果に結びつく、問題に負けない、時代に対応する、素敵で魅力的な人になることを目的としている。「観光」というこれからの日本を牽引できる資源をもって国内外から観光客を迎え入れ、地方を創生する。そのために私達学生に何が出来るかをテーマとしている。

その取組みの1つとして静岡県熱海にてゼミ合宿を行い、温泉と豊かな自然など熱海の持つ魅力をより観光客の方が感じられるよう、熱海の町を散策し様々な発見を通じて、熱海の町がより活性化するように提案を行った。様々な活動を終えた後、増渕先生より心温かいメッセージを受け取った。

「ゼミ生へ。私は君達の為に何が出来たのか？常に課題は自分の中にあると話していたが、課題とは、実は自分の目指す、なりたい姿へ成長する方法であり、これからも能動的に行動して欲しい。達成感や充実感を得たいという君達の想いは、目の前の困難を乗り越え、問題に負けない、時代に対応する、素敵で魅力的な人になる力になっています。これからも問題に負けず変化に対応できると信じ

ています。」

最後に熱海温泉ホテル旅館共同組合理事長目黒俊男氏より感謝と励ましの言葉が贈られた。

「観光地は自分達が魅力的にならなければお客様は楽しめない。今回の武蔵野大学の学生からの提案が一過性なものではなく、これからも継続的に提案していただけることをお願いしたい。とても楽しみにしています。」

〈事例発表 3〉

「大川市の地方創生 ― 契機となった産官学連携―」

福岡県大川市長 鳩山 二郎氏

〔要約〕

大川市を紹介する映像デザイナーを介して、今回武蔵野大学と産官学連携が出来ることとなった。これは人と人とのつながりによるものである。昨年は武蔵野大学から50名の学生を迎え、大川市の人と産業を知っていただいた。学生が沢山の事を学び、各グループに分かれて発表してくれたが、大川市には潜在的な能力があるが発揮されていない、プロモートが出来ていないという、外からの若い目線により大川市の弱さが露となった。正直悔しかった。大川市の弱さに、私自身が負けぬよう学生が教えてくれた。嬉しい想いでもあった。

学生自身が若い時期に大川市で過ごした経験が思い出に残ることを嬉しく思う。大川市での学びが、今後の人生を考える時の気付きの機会となってくればと切に願う。フィールドスタディーズは素晴らしい授業である。大川市で学んだ学生が、これから大川市に学びに来る学生に是非とも、大川市の素晴らしさを伝承して欲しい。大川市と武蔵野大学との結び付きがDNAとなり、これからもずっと繋がっていききたい。

現在各地方自治体において地方創生が大きなテーマとなっているが大川市も地方創生を1つの契機として、他の地方自治体と差別化を図るためにも大川市の特色である木工業強みを生かして、武蔵野大学の学生達と共に発展していきたい。

このFDシンポジウムは後日本学WEBサイト <http://www.musashino-u.ac.jp/> で公開する予定です。基調講演、事例発表、パネルディスカッションでの熱い討議を是非ともご覧ください。

授業改善小委員会の活動 学修IR授業公開

メンバー

小西 啓史	教務部長	城月 健太郎	講師（人間科学科）
明石 修	准教授（環境システム学科）	積田 淳史	講師（経営学科）
渡部 博志	講師（経営学科）	友田 暁子	学務課係長
加納 和子	講師（経済学科）	森 智恵	学部事務課係長

目的

平成 24 年 8 月に中央教育審議会より示された、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」に基づき、本学における学士課程教育の質的転換を具現化するために、本学の教育課程は平成 26 年度より大幅なカリキュラム改革を行った。CAP 制の上限単位数の見直しや 4 学期制の導入（学生の学修効率の向上）のような制度的な改革と共に、学生が自発的・能動的に学修する環境（授業や授業外学修）作りを通して教育改革を実質化すべく、人的リソース（TA / SA）を活用した新たな授業モデルの構築と実践及び授業に関わるハード面・ソフト面における改善事項の検討（例：自習室・授業準備請負トライアル・IC カードリーダーを使用した出席管理等）を進めることを目的としている。

活動

- 第1回：平成 26 年 12 月 9 日（火）「これまでのカリキュラム及び TA 制度改革について」
- 第2回：平成 26 年 12 月 26 日（金）「検討の方向性の共有」
- 第3回：平成 27 年 1 月 21 日（水）「トライアル授業計画の共有・意見交換」
- 第4回：平成 27 年 2 月 12 日（木）「トライアル授業計画の修正・意見交換」
- 第5回：平成 27 年 3 月 5 日（木）「トライアル授業計画の修正・意見交換」
- 第6回：平成 27 年 5 月 7 日（木）「FD研修会での成果報告の方向性について」
- 第7回：平成 27 年 9 月 18 日（金）「トライアル授業（前期）の結果共有、検討」

成果報告

第5回全学 FD 研修会（平成 27 年 11 月 2 日開催）での成果発表、FD 自主発表会の開催

FD 自主発表会の実施について

A. 学修 IR

日 時：武蔵野キャンパス 平成 27 年 12 月 1 日（火）
16：30～17：30
有明キャンパス 平成 27 年 12 月 2 日（水）
16：30～17：30
会 場：武蔵野キャンパス 8301 教室（8 号館 3 階）
有明キャンパス 1-303 教室（1 号館 3 階）
発表者：渡部 博志 講師／積田 淳史 講師（経営学科）
テーマ：学修成果に寄与するための施策検討
～経営学科「学生調査」による学生の実態把握から考える～



B. 授業公開

日 時：平成 27 年 11 月 30 日（月）3・4 限
会 場：武蔵野キャンパス 1202 教室（1 号館 2 階）
担当者：加納 和子 講師（経済学科）
科目名：「統計学 1」
.....
日 時：平成 27 年 12 月 1 日（火）3・4 限
会 場：有明キャンパス 3-301 教室（3 号館 3 階）
担当者：明石 修 准教授（環境システム学科）
科目名：「環境プロジェクト 1・2」
.....
日 時：平成 27 年 12 月 4 日（金）1・2 限
会 場：有明キャンパス 3-301 教室（3 号館 3 階）
担当者：積田 淳史 講師（経営学科）
科目名：「政治経済学特殊研究 2」

学科FD活動

文学部 日本文学文化学科	
日 時	平成 28 年 1 月 27 日 (水) 15:30～17:00
会 場	武蔵野キャンパス 7306 演習室 (7 号館 3 階)
講 師	日本文学文化学科 土屋 忍 教授
テーマ	文学研究科博士課程開設に向けての学部教育と大学院教育の連携・改革について
日 時	平成 28 年 3 月 31 日 (木) 16:00～17:00
会 場	武蔵野キャンパス 大会議室 (B) (7 号館 5 階)
講 師	日本文学文化学科教員
テーマ	新規カリキュラム下における実習・演習科目の教育的効果の検証、及び教育プログラムの変革について
グローバルコミュニケーション学部 グローバルコミュニケーション学科	
日 時	平成 28 年 2 月 3 日 (水) 10:00～17:00 平成 28 年 2 月 4 日 (木) 10:00～17:00
会 場	有明キャンパス 1-501 教室 (1 号館 5 階)
講 師	言語文化研究科 堀井 恵子 教授 グローバルコミュニケーション学科 島田 徳子 准教授 グローバルコミュニケーション学科 村澤 慶昭 准教授 宇野 聖子 本学非常勤講師 藤浦 五月 本学非常勤講師
テーマ	武蔵野大学日本語関連科目のコースデザインと評価について考えるーシラバスにつなげてー
法学部 法律学科	
日 時 会 場	学内グループウェアを活用したミーティング
講 師	法律学科教員
テーマ	学科のセールスポイントである「大教室双方向授業」の実践に向けた学科教員間での認識・技術の向上
テーマ	オープンキャンパスでの高校生へのアンケートを通じて得られた情報の共有と次年度のオープンキャンパスへの対応
テーマ	1・2 年生へ TOEIC や進路についてのアンケートの実施を通じた英語能力向上への啓蒙、資格関連科目等のカリキュラムの検討
法学部 政治学科	
日 時	平成 27 年 5 月 14 日 (木) 18:00～19:30
会 場	有明キャンパス 1-13B 会議室 (1 号館 13 階)
講 師	政治学科教員
テーマ	・ニュース時事能力検定試験 ・TA の活用
日 時	平成 27 年 9 月 17 日 (木) 18:00～19:30
会 場	有明キャンパス 1-13B 会議室 (1 号館 13 階)
講 師	政治学科教員
テーマ	・3 つのポリシーとシラバス「到達目標」 ・入学前教育プログラム

経済学部 経済学科	
日 時	平成 27 年 9 月 17 日 (木) 17:30～20:00
会 場	有明キャンパス 1-8A 会議室 (1 号館 8 階)
講 師	経済学科教員
テーマ	今年度から実施した PC の必携化に関する現状と、来年度以降の講義での PC 利用についての検討など
日 時	平成 27 年 11 月 11 日 (水) 17:00～18:30
会 場	有明キャンパス 1-8C 会議室 (1 号館 8 階)
講 師	東洋経済新報社 出版局エデュケーション室長 茅根 恭子 氏
テーマ	テキストの電子書籍化の進展状況や e-learning の導入に関する検討など
経済学部 経営学科	
日 時	平成 27 年 12 月 1 日 (火) 16:30～17:30
会 場	武蔵野キャンパス 8301 教室 (8 号館 3 階)
講 師	経営学科 渡部 博志 講師、積田 淳史 講師
テーマ	「学修成果に寄与するための施策検討 ～経営学科「学生調査」による学生の実態把握から考える～」
日 時	平成 27 年 12 月 2 日 (水) 16:30～17:30
会 場	有明キャンパス 1-303 教室 (1 号館 3 階)
講 師	経営学科 渡部 博志 講師、積田 淳史 講師
テーマ	「学修成果に寄与するための施策検討 ～経営学科「学生調査」による学生の実態把握から考える～」
人間科学部 人間科学科	
日 時	平成 27 年 7 月 10 日 (金) 16:20～17:50
会 場	有明キャンパス 1-6 A 会議室 (1 号館 6 階) 武蔵野キャンパス 第 3 会議室 (6 号館 2 階) * TV 中継
講 師	人間科学科 城月 健太郎 講師
テーマ	4 学期制移行に伴うカリキュラム編成について
日 時	平成 27 年 11 月 27 日 (金) 16:20～17:50
会 場	有明キャンパス 1-6 A 会議室 (1 号館 6 階) 武蔵野キャンパス 第 3 会議室 (6 号館 2 階) * TV 中継
講 師	人間科学科 城月 健太郎 講師
テーマ	カリキュラムマップおよび DP / CP について
人間科学部 社会福祉学科	
日 時	平成 27 年 6 月 26 日 (金) 18:00～19:30
会 場	武蔵野キャンパス 7205 教室 (7 号館 2 階)
講 師	㈱フロムページキャリア教育担当 和田 豊 氏
テーマ	高校生のキャリア教育を知る
日 時	平成 27 年 8 月 5 日 (水) 13:00～16:00 平成 27 年 8 月 19 日 (水) 13:00～17:00
会 場	武蔵野キャンパス 大会議室 (B) (7 号館 5 階)
講 師	社会福祉学科 熊田 博喜 教授

テーマ	ソーシャルワークのグローバル定義改正と学科ディプロマポリシーの検討
工学部 環境システム学科	
日 時	平成 27 年 5 月 11 日 (月) 17:30 ~ 21:00
会 場	有明キャンパス 1-13B 会議室 (1 号館 13 階)
講 師	環境システム学科教員
テーマ	・学科アカデミックポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムの確認 ・学生の動静に関する情報共有 ・担当授業の紹介、課題等の共有
日 時	平成 27 年 12 月 21 日 (月) 17:45 ~ 20:20
会 場	有明キャンパス 1-13B 会議室 (1 号館 13 階)
講 師	環境システム学科教員
テーマ	・学生の動静に関する情報共有 ・担当授業のふりかえりと反省や課題等の共有 ・来年度のシラバス執筆に向けての相談
工学部 数理工学科	
日 時	平成 27 年 10 月 15 日 (木) 18:00 ~ 22:00
会 場	有明キャンパス 1-407 教室 (1 号館 4 階)
講 師	数理工学科 薩摩 順吉 教授
テーマ	「発展セルフ：社会現象を分析する」について
日 時	平成 28 年 2 月 18 日 (木) 16:30 ~ 18:00
会 場	有明キャンパス 1-406 教室 (1 号館 4 階)
講 師	新潟大学 合田 正毅 名誉教授
テーマ	2 年次から物理の講義が始まるにあたり「物理教育」について
工学部 建築デザイン学科	
日 時	平成 27 年 7 月 20 日 (月) 13:00 ~ 14:30 平成 27 年 7 月 27 日 (月) 13:00 ~ 14:30
会 場	有明キャンパス 演習準備室 (2 号館 4 階)
講 師	建築デザイン学科教員
テーマ	プロジェクトによる活動及び学外出展の実践
日 時	平成 27 年 12 月 7 日 (月) 13:00 ~ 14:30 平成 27 年 12 月 14 日 (月) 13:00 ~ 14:30
会 場	有明キャンパス 演習準備室 (2 号館 4 階)
講 師	建築デザイン学科教員
テーマ	建築設計 (デザイン) 系授業プログラムの検討
日 時	平成 28 年 1 月 23 日 (土) 10:00 ~ 12:00
会 場	武蔵野キャンパス 大会議室 (B) (7 号館 5 階)
講 師	建築デザイン学科教員
テーマ	建築デザイン学科 (環境学科都市環境専攻) カリキュラム個々の検討・改善課題
教育学部 児童教育学科	
日 時	平成 28 年 2 月 4 日 (木) 15:00 ~ 16:00

会 場	武蔵野キャンパス 大会議室 (B) (7 号館 5 階)
講 師	児童教育学科 上岡 学 教授、児童教育学科 高橋 一行 教授 児童教育学科 堀米 孝尚 教授、児童教育学科 義永 陸子 准教授 児童教育学科 生井 亮司 准教授
テーマ	海外研修および国内研修の報告について (モンゴル、サンフランシスコ、ドイツ、ワシントン、韓国、沖縄)
薬学部 薬学科	
日 時	平成 27 年 10 月 21 日 (水) 16:20 ~ 18:00
会 場	武蔵野キャンパス 8301 教室 (8 号館 3 階)
講 師	武蔵野キャンパス学生相談室 紺野 麻希 相談員、嶋 美香 相談員
テーマ	学生のメンタルヘルスケア～「早期発見」と「適応支援」のために～
看護学部 看護学科	
日 時	平成 27 年 11 月 11 日 (水) 13:15 ~ 14:30
会 場	武蔵野キャンパス 第 2 実習室 (2 号館 2 階)
講 師	看護学科 香春 知永 教授
テーマ	学生の可能性を最大限に引き出す武蔵野大学の看護教育
日 時	平成 28 年 2 月 19 日 (金) 9:00 ~ 10:30
会 場	武蔵野キャンパス 第 2 会議室 (2 号館 2 階)
講 師	東京都済生会中央病院 看護部 東 めぐみ 氏
テーマ	臨床現場での新人看護師の育成ーキャリア開発支援の実際と展望ー
教養教育部	
日 時	平成 28 年 1 月 13 日 (水) 17:00 ~ 18:00
会 場	武蔵野キャンパス 大会議室 (B) (7 号館 5 階)
講 師	教養教育部 中込 啓一 准教授、中村 剛 講師
テーマ	『自己の探求』プログラムの効果検証 ー「ジェネリック・スキル」の評価ツールを用いてー
日 時	平成 28 年 2 月 27 日 (土) 10:00 ~ 14:00
会 場	武蔵野キャンパス 大会議室 (A・B) (7 号館 5 階)
講 師	教養教育部 久富 健 教授、IR 推進室 飯塚 信 室長
テーマ	英語 FD 研修会～平成 28 年度英語教育の再構築に向けて～
日 時	平成 28 年 3 月 23 日 (水) 11:00 ~ 14:30
会 場	武蔵野キャンパス 大会議室 (A・B) (7 号館 5 階)
講 師	教養教育部 久富 健 教授
テーマ	外国語教育 FD 研修会 ～平成 28 年度外国語教育の再構築に向けて～
日 時	平成 28 年 3 月 28 日 (月) 10:00 ~ 14:00
会 場	武蔵野キャンパス 大会議室 (A・B) (7 号館 5 階)
講 師	教養教育部 久富 健 教授、IR 推進室 飯塚 信 室長
テーマ	基礎セルフディベロプメント FD 研修会 ～平成 28 年度充実化に向けて～

平成 28 年度 F D実施計画

1. 全学F D

会場

有明キャンパス・武蔵野キャンパス [TV中継]

▶① 平成28年4月19日 (火)

テーマ●

「文部科学省所管事業分野における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応指針（平成 27 年 11 月公表：平成 28 年 4 月より障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律「障害者差別解消法」が施行）に伴う大学における障がいのある学生への支援・配慮」

講師●国立大学法人 筑波大学
ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター
アクセシビリティ部門（障害学生支援室）
准教授 五味 洋一 氏

▶② 平成28年5月21日 (土)

テーマ●

「DP の目標達成に向けて—学習者中心のカリキュラムマップ再考：主体性を見失わないための設計の思想と方法—」

講師●追手門学院大学 基盤教育機構教授、IR・FD担当学長補佐
アサーティブ研究センター長 教授（元名城大学副学長）
池田 輝政氏

▶③ 平成28年10月

テーマ●

「アクティブラーニング—その活用と効果—」

講師候補者●本学教員による事例発表

▶④ 平成28年11月

テーマ●

「学生による学生への学習支援：SA（ピアサポーター）の活躍」

講師候補者●薬学部教員、学生による事例発表

▶⑤ 平成28年12月

テーマ●

「授業評価・学生実態調査（学修時間等）の結果分析と授業改革について—IR—」

講師候補者●未定

2. 目的別F D

（特定のテーマに基づく少人数制実践型ワークショップ型FD）

会場

有明キャンパス

▶① 平成28年6月18日 (土)

テーマ●

「武蔵野 BASIS の再表現：学習者中心のカリキュラムマップから何が見えるか」

講師●追手門学院大学 基盤教育機構教授、IR・FD担当学長補佐
アサーティブ研究センター長教授（元名城大学副学長）
池田 輝政氏

出席対象者：各学科より数名及び希望者 約 30 ～ 40 名

▶② 平成28年6月

テーマ●

「英語による教授法について」

講師●アンナ・マリア教授（カナダ：カルガリー大学）他

出席対象者●グローバル学部所属教員（非常勤講師含む）
及び希望者 約 40 ～ 50 名

▶③ 平成28年7月

テーマ●

「教員による学生（人文・社会科学系）への就職支援について」

講師候補者●各業界の人事担当者

出席対象者●法学部・経済学部・グローバル学部・文学部・
人間科学科所属教員
及び希望者 約 50 ～ 70 名

3. 学科F D 活動

会場

有明キャンパス・武蔵野キャンパス

学科毎に随時実施予定



武蔵野大学 2015FD レポート第 1 号

発行：FD 委員会
発行日：平成 28 年 3 月 31 日
事務局：武蔵野大学武蔵野学部事務室
〒202-8585 東京都西東京市新町 1-1-20
TEL 042-468-3350 FAX 042-468-3040
e-mail: m_gakubu@musashino-u.ac.jp
URL: http://www.musashino-u.ac.jp/